

金沢大学広報誌

[アカンサス]

Acanthus

特別号

2022/03

山崎学長の8年間と 金沢大学の歩み



任期を終える山崎学長からのメッセージ
学長時代の8年間を振り返って
～地域に愛され世界に輝く金沢大学へ～

金沢大学2014-2021年度
主な取り組みプレイバック

学外有識者から見た
山崎学長と金沢大学

任期を終える山崎学長からのメッセージ

学長時代の8年間で振り返って

～地域に愛され世界に輝く金沢大学へ～

この8年間はずっと駆け足だった。金沢大学のプレゼンスを向上させるために、学長就任の瞬間から大学改革を追求して走り続けてきた。

その動機は、悔しさを晴らしたいとの思いからだ。2013年に文部科学省がスタートさせた研究大学強化促進事業にて、決して実力も研究力も低くないと信じていた本学がヒアリングにも呼ばれなかったことに大きな衝撃を受けた。海外はおろか東京でも金沢大学の存在が見えない、所詮は地方の一大学に過ぎない、そんな卒業生からの辛辣な言葉にも大いに刺激された。大学変革への強烈な思いに駆られ、教育・研究・国際化・社会貢献・ガバナンス強化など、全学的な戦略をまとめた「YAMAZAKIプラン」を打ち出して教職員と共に邁進してきた。

中でも、世界に通用する研究拠点の形成を目標に、特色ある研究分野の伸長と分野融合研究の進展を両輪として研究力強化を進めた結果、「ナノ生命科学研究所」構想が2017年度文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」に地方中規模大学で唯一採択されたことは大きな成果といえよう。本学の強みである原子間力顕微鏡技術を核として、ナノ計測学・生命科学・超分子化学・数理計算科学といった異分野の知見を融合・進化させ、世界初の「ナノ内視鏡」開発を目指すという、誰もが有り得ないと思うストーリーを後押しできたことは意義深い。

また、私にとって魂ともいえる思い入れのある改革は「人間力強化の学長宿舎」である。就任すぐに考えを巡らせたのは、日本中の国立大学学長の誰もができないこと、自分にしかできないことは何か、だった。富山県小矢部市の農家に生まれた私がかたどっていた一つの形が、学生たちと共に農作業や山林の手入れに汗を流すことだった。壁にぶつかった時、乗り越える強さを身に付けてほしいとの思いもあった。楽しさと厳しさを織り交ぜて学生たちの人間力を鍛え上げようと、

講義あり、坐禅あり、バーベキューありの多彩な活動を組み込んだ2泊3日のプログラムは、さながら我が子の成長を願う親心を込めた取り組みでもあった。目も開けられないほどの豪雨に耐えて下草刈りをやり遂げた思い出は忘れがたい。甲斐あってか自身の心の弱さや悩みから立ち直ったとの嬉しい声もあった。特に人気を集めたのは地域の民家に一泊する民泊だ。日常的に大人と話す機会の少ない学生たちにとって、かけがえのない体験が得られ、第2の故郷としてその後も交流を温める学生が多くいることは喜ばしく思う。

人は誰しも安定を好むものであり、改革とはその安定を崩すことだ。ゆえに組織の半数以上が反対する改革こそやる価値がある、というのが私の信条である。変化が大きいほど組織の反発も大きくなる。それを乗り越えるために重んじたことは、現状を知るために足を運ぶ「現場主義」と教職員全員との「徹底対話」だ。例えば、英語による授業を学士課程で50%以上、大学院で100%という非常に高い目標を設定し、「スーパーグローバル大学創成支援(SGU)」事業の採択へと実を結んだ時も、自ら各所に出向いて協力を要請した。他にも、国立大学法人運営費交付金の重点支援の枠組みで「世界卓越型大学」を目指す「重点支援③」を選択したときや、第4の学域「融合学域」設置のときなど、大変革の際には必ずコミュニケーションの機会を設けて道筋をつけた。直近では、日本一の大学院をつくるための改革に向けて対話を重ねてきた。総じて大学変革を実現させる近道は、教職員の意識改革に尽きると実感している。

常識を覆すような組織改革も推進した。国からの運営費交付金減少に伴う全国的な人件費抑制の流れの中で、本学でも減少傾向だった教員数をあえて回復させてきたことである。「組織は人なり」は私の信念であり、「皆が頑張る金沢大学」には多くの優れた人材が欠かせない。だからこそ全人事について自ら

携わり、活躍の場となるポストも増やした。

とはいえ、掲げた全ての改革が達成できたわけではない。法科大学院の定員充足や司法試験の合格率アップ、大学院改革、産学連携の強化、資産形成、大学発ベンチャーの育成など、どれだけ力を尽くしても成し遂げられない課題が残ったことは心惜しい。

私の頭の中にはかねてから思い描く金沢大学の未来像がある。金沢の奥山に第2キャンパスを新設する「学生3万人構想」だ。実現には、新たなデジタルコンテンツの開発・普及による海外の学生や社会人の獲得といった視点のみならず、一大学、一企業、一団体の枠組みを超えた協働によって金沢の街全体で「文化・学術研究開発都市未来構想」の実現を目指す視座が必要だ。そのためには、多くの人を引きつける「街の魅力アップ」が不可欠である。本学はこの4月、地域資源を活かして新たな観光価値を創出し、観光ビジネスを牽引できる人材の養成に向けて融合学域観光デザイン学類を新設する。日々の暮らしに

息づく石川・金沢の豊かな文化をいかに活かし磨きをかけていくか。ぜひこの学類で追究し、地域と一体となって盛り上げていただきたい。

まもなく春が訪れ、本学のキャンパス内には約3,600本の桜が咲き誇る。2016年には「一度は歩いてみたい国内大学の桜名所ランキング」で角間キャンパスは西日本1位に輝いた。しかし、改めて見ると蔓が巻き付き、あちこち枝が折れた桜の姿が。いても立ってもいられず、キャンパスを歩き回っては蔓切りを根気よく続けてきた。「キャンパス内の桜の木5千本計画」を立ち上げ、これまで100本近く植樹を行ってきたのもキャンパスを愛すればこそ。教職員、学生、そして同窓生の皆が金沢大学を想い、つながり、力を合わせることで、地域に愛され世界に輝く金沢大学として花開く未来を心から願う。

金沢大学 第11代学長 **山崎光悦**

金沢大学 2014-2021年度 主な取り組みプレイバック

先端技術の飛躍的な進展と普及、さらには未曾有の災害や新型コロナウイルスの出現によって世界が大きな変革期を迎える中、山崎学長率いる金沢大学が何に取り組み、どう社会貢献を果たしてきたか、その一端をご紹介します。

2014年度

「チェンジ&チャレンジ」を掲げ
全学的な「改革」をスタート!

4月

第11代学長に山崎光悦が就任

2018年4月および20年4月に再任。22年3月までの計8年間にわたり大学改革をけん引。



大学改革推進委員会・教員人事戦略委員会を設置

大学改革のさまざまな取り組みや戦略的な教員配置・人材登用の実現に向けた司令塔に。

超然・先魁プロジェクトを創設

卓越した研究を重点的に支援する独自制度。

5月

8年間の改革の基盤!

YAMAZAKIプラン2014を策定

大学改革の指針かつ改革の具体化に向けた行動計画。以降、進展状況を踏まえ隔年で改訂。

金沢大学(グローバル)スタンダード(KUGS)を策定

本学が育成する人材像を5つのスタンダードで具体化。2021年度からはSTEAM教育の拡充に伴い6つに。グローバル社会で活躍するための能力・体力・人間力の育成を目指す。

8月

人間力強化プログラム「学長と行く合宿シリーズ」第1弾を実施

翌年度以降、「地域「超」体験プログラム」として、珠洲、小木、白山麓、五箇山の4地域で実施。



坐禅、民泊などを織り交ぜ2泊3日で人間力を強化。

9月

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援(SGU)」事業に採択
徹底した国際化を全学的に推進。

2015年1月

リサーチプロフェッサー制度を導入

優れた研究力を有する教員に、研究に専念する環境を整備し、卓越した研究分野を先鋭化。

2015年度

国内外のステークホルダーとの
交流を促進し連携を深化・拡充!

4月

新学術創成研究機構を設置

分野融合研究を進展させ、革新的な研究成果の創出から新学問領域の創成を目指す。

スーパーグローバルELPセンターを設置

全学的な英語力の向上を目的として、学生・教職員向け英語学習プログラムを提供。

※ELP: English Language Programs



ネイティブの専任教員が指導。

7月

ステークホルダー協議会を初開催

広く本学の今を発信するとともに、意見を伺い、大学運営に反映。以降、毎年度開催。

2018年度には東京、19年度には大阪でも開催!



9月

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択

石川県内の全自治体と国公立8大学が協定を結び、若者の地元定着を促進。

第1回海外同窓会総会を本学で開催

海外同窓会との連携を強化。以降、隔年でインドネシア、ベトナム、ミャンマーで開催。

2016年度

共通教育科目を全て刷新し、
新たな教育カリキュラムを導入!

4月

国際基幹教育院を設置

KUGSに基づく共通教育を推進する司令塔として、教育全体の高度化と国際化をけん引。

大学院先進予防医学研究科を設置

千葉大学、長崎大学、本学が連携した共同教育課程で先進予防医学の専門家を育成。

大学院教職実践研究科(教職大学院)を設置

高度な専門性を有する次代の教員を育成。

文部科学省
共同利用・共同研究拠点に認定

がん進展制御研究所は2010年度に続き再認定、環日本海域環境研究センターは初認定。



5月

新たな教員評価制度を導入

教員に対する評価結果を給与と処遇へ反映する、国立大学初の取り組み。

7月

金沢大学スポーツ・地域活性化プロジェクトが始動

本田圭佑氏が手掛けるHONDA ESTILO(株)および金沢市と協働しスポーツ活動を通じた街づくりに貢献。2017年には角間キャンパスにサッカー場などを整備し一般共用を開始。



関係者が参集し、プロジェクトがキックオフ。

10月

本学リサーチプロフェッサーがノーベル化学賞を受賞

ジャン＝ピエール・ソヴァージュ博士(仏・ストラスブール大学名誉教授)が分子機械の設計と合成に関する研究でノーベル化学賞を受賞。



受賞直後に本学で集中講義を行うソヴァージュ博士。

2017年2月

トビタテ!留学JAPAN
第6期合格者数が国立大学で第2位

申請した学生皆に学長自ら面接・プレゼン指導し、合格を後押し。2022年2月までに95名が同プログラムで海外へ留学。

3月

シェアハウス型の学生・留学生宿舎「北溟」を新設

2012年オープン(先魁)に次いで設置した、日本人学生と外国人留学生の混住宿舎。キャンパスにいなが国際感覚を醸成。



2017年度

地方国立大学として初の快挙!
世界トップレベル研究拠点の形成へ!

4月

肝がん分野では世界初
世界保健機関の協力機関に指定

世界保健機関(WHO)から「WHOコラボレーティングセンター(WHO-CC)」に肝がん対策と肝炎対策の分野で本学が指定される。

6月

先進予防医学研究センターを設置

0次予防から3次予防までを包括した「個別予防」実践のための研究を推進。

文部科学省「留学生就職促進プログラム」に採択

信州大学と共同で申請した「かがやき・つなぐ」北陸・信州留学生就職促進プログラムが採択され、北陸・信州地域の外国人留学生の国内企業への就職を促進。

7月

第1回鈴木大拙-西田幾多郎記念
金沢大学国際賞授賞式を挙行

哲学・思想・宗教を中心とする分野で国際的に卓越した業績を挙げた研究者を顕彰。



第1回受賞者は仏・極東学院名誉教授のジラル・フレデリック・ルネ・ロベール氏。これまで3名に授与。

8月

タイ・バンコク事務所を新たに開所

国立六大学バンコク事務所として共用を開始。このほか海外との重点交流拠点として2015年以降ベルギー、中国、アメリカなどに事務所を設置。



現地との共同研究・学生交流の拠点。本学の大学間国際交流協定校モックツト王工科大学トンプリ校の協力で実現。

文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に採択

ロシアの10の教育研究機関と連携した、日露の未来のリーダー育成に向けた取り組みを展開。



2019年7月には「石川」～ロシア大学交流コンソーシアム」を設置し、両国間の学生交流を拡充。

9月

文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」に採択

地方中規模大学として初めて採択。ナノ生命科学研究所を設置し、生命科学における「未踏ナノ領域」の開拓に向けた融合研究を推進。



2020年9月には角間キャンパスに新研究棟が完成。アンダーフLOORで異分野の研究者が集う。

2018年2月

第7回地域産業支援プログラム表彰
事業において文部科学大臣賞を受賞

「能登里山里海マイスター」育成プログラムが優れた地域産業支援の取り組みとして受賞。

2007年度の開始以来、20年度までに205名のプログラム修了生を輩出!



2018年度

学士課程でも大学院課程でも
異分野融合の学びを推進!

4月

学士課程を3学域・17学類に再編

社会のニーズに応え、人間社会学域地域創造学類に観光学・文化継承コースを、理工学域にフロンティア工学類、生命理工学類を新設。

大学院新学術創成研究科を設置

北陸先端科学技術大学院大学との共同教育課程で、科学技術イノベーション人材を育成。2年後にはナノ生命科学専攻を新設。

7月

高大接続・コアセンターを設置

KUGSに基づいた入学選抜方法の調査・開発を推進。多様な潜在能力を有する人材を幅広く本学に受け入れ育成することを目指す。

金沢大学コンテスト「超然文学賞」「日本数学A-Impiad」を創設

高校生の特異な才能を見いだす本学独自のコンテスト。2021年度入試から各受賞者を対象とした特別選抜を導入。



8月

ナノマテリアル研究所を設置

優れた省エネ・創エネ性能を発現する新規材料やデバイスの開発・高度化により、実用化に向けた研究開発を加速。

金沢駅前サテライトを設置

社会人の学びや産学官連携、本学の情報発信などの場として展開。

2019年2月

先端科学・社会共創推進機構を設置

基礎から応用までの一貫した研究支援および産学官連携と地域連携を一体的に推進。

2019年度

社会的課題を解決できる
イノベーター人材の養成を加速!

4月

理工学域能登海洋水産センターを設置

海洋生物資源の研究推進と、地域に密着した新技術・新産業創出人材の育成を担う。



九十九湾を臨む滞り型教育研究施設。能登町との「人づくり・海づくり協定」を基に同町の支援を受けて実現。

文部科学省「WWLコンソーシアム構築支援事業」に附属高等学校が採択

拠点校として北陸圏域の高校や企業などと連携し、次代のグローバルリーダーを育成。

※WWL: ワールド・ワイド・ラーニング

2019年5月

金沢大学シリコンバレーオフィスを開所

IT産業の集積地シリコンバレーにおいて学生の海外留学やインターンシップ、教員らの研究活動などの拠点として活用。



同オフィスを拠点に世界的な企業でインターンシップする学生。

6月

設計製造技術研究所を設置

国内外の研究機関や企業と連携し、次世代の設計生産技術の開発と社会実装を推進。

7月

先導科学技術共同研究講座を設置

本学初の共同研究講座。(株)ダイセルと大学院自然科学研究科が「セルコースでつながり、未来を拓く」をテーマに研究を推進。

8月

文部科学省「卓越大学院プログラム」に採択

大学院4研究科をまたぐ「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」で革新的予防・診断・治療法の創出を担う博士人材を育成。



学長自ら講義、指導するプレプログラムを実施。

9月

附属病院が厚生労働省「がんゲノム医療拠点病院」に認定

がんゲノム医療センターにおいて、がん遺伝子パネル検査の結果を基に、他の診療科やかかりつけ医と連携しながら最適な治療法を提案。



2020年度

コロナ禍でも間断ない学生支援と教育の高度化・研究の先鋭化に注力!

4月

大学院法学研究科を設置

法曹・法律専門職、法学系教育研究者の養成を目指し、大学院人間社会環境研究科法学・政治学専攻と大学院法務研究科を統合。

5月

「緊急学生支援金」制度を創設

コロナ禍での家計急変などで経済的に困窮している学生へ独自の経済支援を実施。

10月

文部科学省「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業(COC+R)」に採択

信州大学、富山大学、本学を中心に3県の自治体、経済団体や企業と連携し、地域の基幹産業を創出する原動力となる人材の育成を目指す。

11月

研究基盤統括本部を設置

学内研究支援組織・共同利用施設をプラットフォームに統合し、研究基盤に係る事業・人材・情報を統括し、マネジメントを強化。

文部科学省「国立大学経営改革促進事業」に採択

世界と伍する教育研究拠点形成に向け、社会の期待に応え投資を呼び込む「社会とのサーキュレーション」を確立し、地方の中規模総合大学における経営改革モデルの構築を目指す。

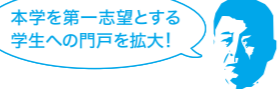
12月

文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」に採択

「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成」をテーマに、文理融合型のSTEAM教育を全学的に展開。

独自性を際立たせる入試改革を先行 多彩な選抜方法の導入と後期日程廃止

2018年度入試からの文系一括・理系一括入試に加え、21年度入試からKUGS特別入試、超然特別入試など独自の特別選抜を導入。



2021年度

ポストコロナ時代を見据えた 未来社会創出のフロントランナーへ!

4月

学士課程を4学域・18学類に再編 新たに融合学域を設置

社会変革人材の育成を目指す融合学域先導学類、医学と薬学双方の知見を有する研究人材を育てる医薬科学類を新設。

高度モビリティ研究所を設置

自動運転技術に関する研究開発に加え、高度モビリティを活用した社会的課題の解決と未来社会の創造を目指す。



学術メディア創成センターを設置

ポストコロナ時代の新たな教育研究基盤の構築に向け、全学的なDX計画を統括・推進。

疾患モデル総合研究センターを設置

目覚ましい生命科学分野の技術発展と学内外の研究ニーズに対応。

教学マネジメントセンターを設置

全学の教育改善と教学マネジメント改革を推進。

7月

バイオマス・グリーンイノベーションセンターの整備を開始

2018年7月に締結した「産学連携の包括的推進に関する協定」を基に連携を深化させてきた(株)ダイセルの支援を受け実現。



2023年秋に竣工予定。写真右：(株)ダイセルの小河義美社長。

新型コロナウイルスワクチン 大学拠点接種(職域接種)を実施

8月までに、本学および近隣大学などの学生・教職員など合わせて約1万1千人に2回接種。



9月

人間社会学域学校教育学類共同教員養成課程の設置が認可

富山大学との共同教員養成課程を2022年4月設置予定。教育現場における現代的な課題を解決する人材養成を目指す。

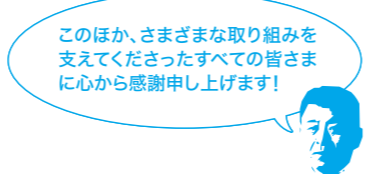
11月

北陸未来共創フォーラムを創設

北陸地区の国立4大学と北陸経済連合会を中心に、多様な企業・団体・行政機関と構成。業種や組織の壁を越えて新たな価値を創成する土壌を形成し、地方創生に寄与。

融合学域観光デザイン学類の設置が認可

新たな観光価値を創出し、観光ビジネスをけん引する人材を養成。2022年4月設置予定。



学外有識者から見た 山崎学長と金沢大学

ステークホルダーの各界を代表する5名の方々に、一言メッセージをお寄せいただきました。

改革を越え世界へ

金沢大学学友会名誉会長 元金沢市長

山出 保 氏



金沢大学は、近年、とりわけ改革の渦中にある。林元学長が大学の法人化を成し遂げ、中村前学長はキャンパスの角間地区への総合移転を完成、山崎学長は、大学改革を果敢に進められた。特に、国立大学法人運営費交付金に関し、世界トップ大学と伍して卓越した教育研究を展開する「世界卓越型」を選択した時、これには学内の反対が強かったと聞いた。しかし、もし「この選択がなかったら、金沢大学の優位性は確保されただろうか」と問われ

れば、私は学外者ながら即座に「ノー」と答えたい。

金沢大学は、高速原子間力顕微鏡に続く新たな技術の研究を確実に発展させながら、学術研究の視座を日本海中心から世界に置き、社会科学の領域を加えた全学挙げての強固な研究体制を、今一度構築すべきと考える。

山崎学長へはこれまでのご功績に敬意を表し、前学友会会長として感謝の意を述べさせていただくとともに、バトンを受ける和田新学長のご活躍に大いに期待したい。

仕事人☆山崎光悦

筑波大学長 国立大学協会会長

永田 恭介 氏



改革を唱える者、仕事人を自負する者は結構いる。しかし、本当の仕事をする者はそうはいない。山崎光悦はその希少な者の一人である。自学では学際的な教育研究推進を掲げ、先導的な人事給与と制度を構築・運用し、国際基幹教育院、新学術創成研究科、新学術創成研究機構を設置するなどの改革を進められた。卓越した成果の一つは、ナノ生命科学研究所のWPIへの採択であろう。

答申に大学等連携推進法人のアイデアを盛り込むことができた。その制度を最初に活用したのは山梨大学と山梨県立大学である。

小職が国立大学協会の会長を務めた間、仕事人には2年間副会長のお一人をお願いした。国際交流委員会をお任せし、また、国立大学法人ガバナンス・コードを策定いただいた。どちらも小職が副会長時代に持て余していたものである。前者では留学生の定員問題や入試について検討され、後者は霞が関と悪戦苦闘のやり取りをされながら2020年度末にまとめられた。

それだけではない。2021年4月には、(一社)リサーチ・アドミニストレーション協議会を誕生させたのである。大学ごとにバラバラに進められてきたURA制度に調和をもたらそうという協議会であり、ありがたいかぎりである。

この仕事人は、農業実践者であり、趣味(酒席?)であり、カラオケの名手でもある。これからも力強く仕事を楽しみたいと切に思う。

大学との連携が地域を変える

珠洲市長 泉谷 満寿裕 氏



珠洲市における人材育成事業は、林元学長のご支援を賜り、2007年度から文部科学省の外郭団体である科学技術振興機構の補助事業としてスタートしました。その後、中村前学長を経て、2014年度に就任された山崎学長に継続いただけてきました。現在は、「能登里山里海SDGsマイスタープログラム」となり、これまでに通算で205名が修了しています。

地域を維持・発展させるためには、地域の「質」を高めることが重要であることから、金沢大学と連携して取り組んできました。2018年度からは、山崎学長のご支援を賜り、「能登SDGsラボ」も開設し、おかげさまで、移住者が着実に増加するとともに、東証一部上場企業が本社機能の一部を珠洲市に移転するなど、珠洲市は大きく変化してきました。山崎学長には、改めて心より感謝申し上げます。

激動期の中にチャンスあり

中村留精密工業株式会社 代表取締役社長

中村 健一 氏



2021年6月まで金沢大学先端科学・イノベーション推進機構協力会会長を務めた。会長を仰せつかったのは9年前になる。

かねがね、優秀な学生を育てるには優秀な教員が必要であると思ってきた。若い先生方には現在の産業界の現場を見ていただき、産学がかけ離れないようにしていただきたい、との思いも持っていた。そのため、各企業の現場見学会や懇親会を開催し、加えて若手研究者の奨励賞を創設した。奨励賞では、審査の上、医療

系から理工系まで幅広く援助することができた。これらの費用は産業界の良識ある企業のトップに特別会員として特別会費を出していただいた。

その間、山崎学長の人となりを知った。大学を愛し学生の中に入り、熱っぽく情熱を持って若者に接していた。文部科学省の対応にも大変活動的で、ここに山崎学長ありと言われる成果を上げてこられた。私は相性の良い方だと思っている。特に芋焼酎を手に入れば、良い方と巡り会えた。

となり村の山崎光悦学長さん、ども!

元文部科学大臣 馳 浩 氏



田んぼと用水を間に挟んだ、わずか200メートルほど離れたとなり村同士に山崎学長と私の実家があります。毎年8月15日の午後「立山」をぐいぐい飲み干す姿には、村の公民館で国政報告会(自民党と共産党と維新の会合同)が開催され、ひとしきり論戦を楽しんだ後、学長の自宅で一献。「馳さん、地方大学の定数増しな

いとあかんちゃ!(ダメダヨ)」とか、「文部科学省の国立大学への予算のメリハリが大切なが金沢大学にちべたいがないか!」

で、任期満了で退任したらどうするの? まだ人生戦略はありますよね!? 一度、金沢の銘酒をぶら下げて、お宅訪問しますね。

※1.文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム」 ※2.リサーチ・アドミニストレーター

定雲止水 鳶飛魚躍

山崎光悦書



ていうんしすい うち とび さいこんたん
【定雲止水の中に、鳶飛び魚躍】活動的であっても動きすぎず、静かすぎる中にも必要な動きをすること。動中の静、静中の動。中国の古典「菜根譚」より。

